



JALの東北応援の歩み、 今までもこれからも。

行こう！
東北へ
JAL東北応援プロジェクト

東日本大震災からこの3月11日で丸5年を迎えます。JALグループは、2013年6月にJAL東北応援プロジェクト「行こう！東北へ」を立ち上げました。震災発生から今まで、私たちJALグループが、東北の応援についてどんな取り組みを行ってきたのか、これまでの活動の一部をお伝えします。



上／2011年4月13日に供用開始した仙台空港を離陸する1番機「がんばろう日本」塗装機。右／福島県のアンテナショップの店頭で歩行者の方へ、故郷の福島県をPRする客室乗務員。

2011年
3月12日
初動支援
被災地に向け
臨時便の
運航を開始

東日本大震災が起きたのは、JAL経営破綻の約1年後、再生に向けて体制を立て直しつつあるときでした。大規模な災害発生により、航空輸送事業も打撃を受けることが予想され、社内には大きな不安が広がりました。観光旅行を取りやめるお客さまが多数出る一方、東北では避難・復旧のための臨時便の運航が一度でも多く望まれました。そんな状況のなか、JALグループはもてる資源を被災地に集中投入し、いち早く東北への空路を開きました。震災翌日の3月12日から7月24日に至るまでの間に、東北地方に2674便の臨時便を運航し、約20万名を超えるお客さまをお運びすることができました。

全国から乗務員、地上スタッフ、空港作業車などを東北の各空港に送り込み、臨時便運航を支援。臨時便により貨物スペースも拡大したため、支援物資輸送にも極めて有効でした。加えて被災地支援者への無償搭乗の引き受けや、チャリティ・マイル、社員募金なども実施。そうして震災発生から約1カ月後の4月13日には、大きな被害を受けた仙台空港の供用が再開し、初便を運航したのです。

2013年
6月～
地元復興
東北の
応援団として
物産販売を支援

東京にいても東北を応援できる取り組みとして、2013年6月から東北各県の自治体と共同で、各県の名産品販売支援のイベントを開始しています。このイベントは、各県出身の社員と、社員ボランティアスタッフが一緒に特産品をPRし、販売のお手伝いや観光パンフレット、JAL機内でご提供しているキャンディや手書きのメッセージカードなどを歩行者の皆さまに配布し、東北旅行の呼び掛けを行うものです。

実施当日は、当社役員も駆けつけて全員が大きな声をあげ、県のPRを実施しています。2014年までは有楽町のJALプラザ前で実施していましたが、2015年は東京各地にある東北各県のアンテナショップに出向き実施しました。また、年度末の3月には「東北市場@天洲ビル」と銘打ち、JAL本社入居する野村不動産天洲ビルのウィングホールにて、東北6県と共同で、各県名産品の販売会を行っています。

ゆるキャラもPRにひと役買うなか、JALグループの社員など多数が来場し、たくさん商品の購入。東北の味を楽しみながら応援しています。

2013年
7月～

被災された方の応援
「JAL
笑顔の贈り物
プロジェクト」

2013年7月より、夏休み期間に震災で親御さんを亡くされたお子さまとその保護者の方を沖縄旅行にご招待し、旅という非日常の環境のなかで笑顔を取り戻して、前を向いて進んでいくきっかけをプレゼントするプログラムがスタートしました。

被災された方々に、少しでも笑顔を取り戻していただくことを願って、「JAL笑顔の贈り物プロジェクト」と名付けました。このプログラムを実施するための招待に掛かる費用は、社員の募金と、会社からの同額マッチング（加算）で賄われます。

また、旅に同行する社員ボランティアは毎回公募で決定していますが、応募



上／青い海、明るい太陽のもと、笑みがこぼれる参加者の皆さま。『JALプライベートリゾートオクマ』のアーチの前で。下／沖縄の海の美しさを体験できる、シュノーケルはアクティビティのなかでも大人気でした。ハイ、ピース!!

募者たちの東北への熱い思いはさまざまであり、選考作業は大変難しい限りです。

昨年は宮城県組の旅行で、台風のために当初の旅程を変更することになりました。しかし、台風で外出できない状況のなか、部屋でシーサーを制作したり、普段言葉にしていなかった保護者の方への感謝の気持ちを表すカードを作成したりと、大変思い出になる取り組みを行いました。

このプロジェクトは、被災地の皆さまに寄り添い、笑顔になっていただくことを目的に行っていますが、逆に参加者の皆さまから社員ボランティアが力をいただいています。今までの実施回数は5回。参加者数は宮城県から43家族・104人、岩手県から17家族・41人、同行したボランティア数は20名です。

この旅で生まれた笑顔が被災地の活力となり、未来の東北へ繋がることを祈って、これからも継続していきます。

2013年
9月～

地元振興
行って、見て、
買って、被災地
を感じる研修

「被災地に来て、見て、消費してほしい」との被災地の声にお応えするため、私たち自身が率先して被災地を訪問する研修プログラムとして、1泊2日の研修を実施しています。

被災地の現状を正しく理解するため、現地の語り部ガイドのお話を伺ったり、仮設住宅の清掃などのボランティア活動を実施するほか、仮設商店街で買い物をするなどして復興を応援する社員研修です。2013年度は宮城県南三陸町・女川町、2014年度は岩手県宮古市・大槌町、2015年度は宮城県名取市、亘理町、福島県福島市を訪れました。社員が有給休暇を使い、参加費も必要ですが、2013年9月から開始したこの研修は年間10回程度実施をし、これまでに25回開催（3月1日現在）。JALグループ社員は738人が参加しています。

研修参加者のひとりにはこう話します。「被災地を訪れるたびに被災された方々が『多くの方が来てくれることが私たちの元気の源です』と笑顔で力強く言ってくれ、私たちが復興支援をするというより、逆に被災地の皆さまから励まされていると痛感しています」（2015年7月参加…松浦浩次）



語りあげ
宮城県南三陸町にて、想像もできないようなつらい体験をされた語り部の方の話に聞き入る参加者たち。

2016年3月～

「これからの復興支援に向けて……」

災害から5年が経過し、復興の兆しはあるものの、被災地を訪れて感じることは、復興の道のりはまだまだ遠いということです。一つ一つは小さな取り組みかもしれませんが、これからもJALらしい取り組みを模索しながら、応援の歩みを前に進めていきたいと思ひます。

まず、被災地を忘れないこと、被災者に寄り添うこと、そんな思いを胸に継続することで、これからも復興を応援していくことができたいと思ひます。1日でも早い復興を祈りながら……JALは2016年度も引き続き、東北を応援していきます。